

初級日本語教材『さんぽ』ができるまで

川上ゆか (広島修道大学)

鬼頭夕佳 (エコール・ポリテクニク)

佐藤純子 (エコール・ポリテクニク)

1. はじめに

フランスのエコール・ポリテクニク出版から 2015 年夏に第 1 巻が、そして翌 2016 年秋に第 2 巻が出版となり、現在第 3 巻を準備中の初級用教科書『さんぽ (フランス語: promenade)』⁽¹⁾。この教科書プロジェクトを始めたきっかけ、作成にあたって考えたこと、作業中の諸々、実際に使ってみた感想などを著者がざっくばらんに語ります。皆様のご参考になれば幸いです。

2. プロジェクトのスタートまで

私たちは当時、フランスのグランゼコールを中心に日本語を教えていました。グランゼコールはフランス独自の教育システムで、社会発展に寄与する高度な専門職の養成を目的とする高等教育機関です。入学には、大学進学資格「バカロレア」取得後、2年間の準備過程を経て、試験に合格しなければならず、グランゼコールのトップ校はエリート養成校として有名です。こうしたグランゼコールの多くで日本語が学ばれていますが、日本語は選択必修科目の第 2 外国語か、選択科目の第 3 外国語という位置付けです。学習時間も多くありません。学生は、これといった具体的な目標があるわけではなく、アニメや漫画で知った日本や日本語というエキゾチックな言語への漠然とした興味で、なんとなく日本語を選ぶ場合がほとんどです。また、学生にとって、専門科目の授業が真剣勝負であるのに対し、語学の授業は余暇活動的な位置づけであったりします (鬼頭 近日掲載: 発表 2013)。こうした学習者を対象に、日本で出版されている総合初級用教科書を使用した文法積み上げ式の授業が行われていました。また学生のレベルについても、～課までやったと言えば、教師間で共通認識が得られるといった風でした。

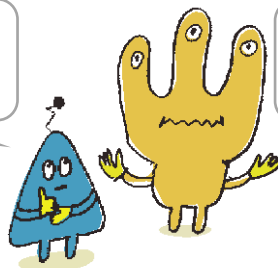
こうした状況の中、私たちそれぞれがモヤモヤとした思いを抱えていました。

積み上げて、積み上げて、
どこへ行くの？

将来役に立つかもしれないスキルより、
今「できた！」って感じが大切じゃない？

コミュニケーション能力をつけるって
言っても将来使う予定もないしね。

日本語やってる自分を
楽しむみたいなの、ダメ？



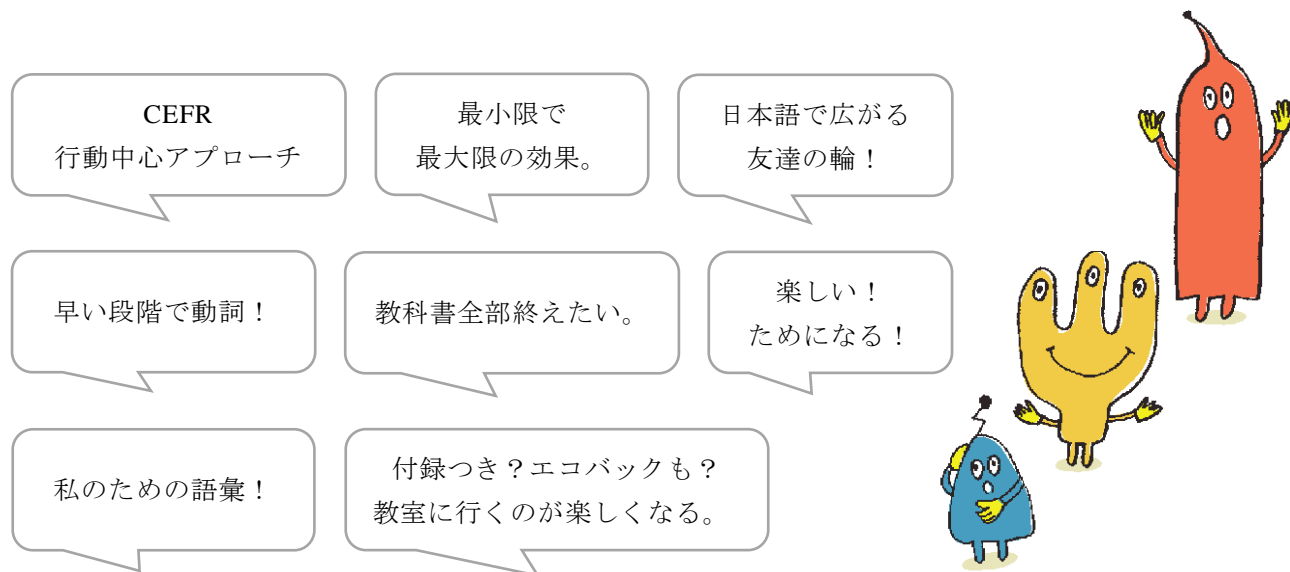
このモヤモヤ払拭のため、川上と鬼頭はそれぞれのクラスで、ある実践を試みました (川上 & 鬼頭 近日掲載: 発表 2013)。川上は、動機の維持が課題となっていた履修 2 年目のクラスで、まず Can Do を設定し、それに必要な文法項目を使用教科書の中から提出順に関係なく選んで、

なぜそれを学ぶのかを明確にしようと思いました。ところが、学期末の学生からの授業評価はよくありませんでした。一番の批判は、教科書の順番通りに進まないこと、教科書をあまり使わないことでした。批判の要因は、教師の説明不足や、新しいやり方に対する学生の抵抗など様々だと思われませんが、教科書の使い方に対する不満という形で現れました。

鬼頭も、他のグランゼコールの同じような課題を持つクラスで一つの試みをしました。同僚の同意を得て、川上同様、ある期間、教科書の数課を Can Do ベースに組み直したのです。しかし、結果として、同僚からあまり良い反応が得られませんでした。主な理由は、授業の準備が増える、付属の副教材が使えないなどでした。多くの日本人教師が非常勤講師で、いくつもの学校を掛け持ちしているフランスの現状を考えると、ある意味納得のできることです。

この取り組みの間、今更ながら、教室の一構成要素である教科書が教室のあり方にかなり影響していること、そして、新しい教室を目指しているにもかかわらず自分たちが長年慣れ親しんできた教材や教え方から抜け出せていないことに気づきました（これを「〇〇の呪縛」と呼ぶ）。問題は、学生や同僚よりも、むしろ私たち自身にあったのです。こうして、私たちがどんな教室を目指したいのか、そのためにはどんな教材があったらいいのか、再度話し合いました。そして、川上担当クラスの教材を作成することにしました。これが本プロジェクトのきっかけです。そこに同じようにモヤモヤした思いを抱えていた佐藤も加わりました。

その頃の私たち三人三様の「こうしたい！」はこんな感じです。



これを皮切りに履修1年目のプログラムも見直し、教材を作り、試し、直すという作業を始めました。そんなある日、偶然にも大学の出版担当者から日本語教育関連の本の出版予定の有無を問われたので、この自主教材の話をしました。こうして出版プロジェクトがスタートしました。

3. いよいよ作業開始！

実際の執筆の前には、いろいろな点を詰めていかなければなりません。自分たちの理想を形にするためにどんなやり方があるのか、すでに出版されている教材を参照しました。まず行動目標 (Can Do) があり、それに必要な文法項目・語彙を学ぶ。この形は、行動中心アプローチに基づいたフランス語教科書 « Version Originale »⁽²⁾ を参考にしました。会話ページの吹き出しは

『にほんごこれだけ!』⁽³⁾の影響が大きいです。限られた時間の中、最小限の材料で最大限の効果をあげられたらと、よく参考にしました。当時、自分たちのプロジェクトを「それだけ?」と呼んでいたほどです。

あるところまで方針が決まったら、大筋を決め、ユニットを分担して書き、それを読みあいながら最終的なものへと仕上げていきます。私たちは文法の専門家ではありませんので、文法説明のために、様々な文法書や教科書、ネット上の情報を参考にしました。日本語に限らず、英語やフランス語で書かれたものも参考にしました。フランス語の文法教育の教材・資料にあたることもありました。そして、執筆の際には、簡潔で、しかも十分な説明を心がけました。いろいろな用法をつい説明したくなる自分を戒めながら（ここでも呪縛が!）、そのユニットで必要なものに限るようにしました。とはいえ、知識として喜ばれると思われる情報は NOTE として加えたり、ZOOM で扱ったりしています⁽⁴⁾。私たちの学生は、コミュニケーションの道具を増やすためだけでなく、どちらかと言えば、知的好奇心を満たすため、人として豊かになるために学んでいる場合が多いので、「なるほど!」と思えることも大きなポイントの一つだと考えているためです。教師としてのこれまでの経験がこうした選択の上で生きていればいいと願います。説明はフランス語です。フランス語を母語とする学習者の視点に留意し (BEACCO 2014, 鬼頭 2015)、彼らにとってのわかりやすさに努めました。そのため、フランスで出版された教材を参考にしたり、日本語を理解しないフランス語母語話者の同僚教師に意見をもらったりしながら書き進めました。また、例文を多く入れ、なるべく自然なフランス語訳を添えるようにしました。

会話にはストーリー性があった方がいいと考えました。それには登場人物を設定しなければなりません。本書ではなんと宇宙人です。なぜか。初級教科書の第 1 課で習う「〇〇人」。ヨーロッパにいと「〇〇人です」と単純に言えない場合もあり、それはアイデンティティの問題なのか国籍の問題なのか、実は分からなくなっていました。宇宙人としたところで根本的な解決にはなりません、少なくとも国籍問題からは脱出できると考えました。それに、宇宙人なら、いろいろな逸脱行為も、初級にありがちな微妙な日本語も、宇宙人的ユーモアとして受け取ってもらえるのではという下心もありました。そして、クスッとしたり、クラスメートと顔を合わせてニヤッとしたりできるような、楽しいものにしたいと思いました。

互いが書いたものを読んだ意見交換は非常に刺激的でした。長年同僚として働いてきていても教室での姿は意外と知らないものです。そんなやり方があったのかと驚き感心するときも、そんなやり方でいいのかと反論したくなる時も、常にこれまでの自分と向きあわざるを得ず、とてもいい勉強になりました。言語規範についても考えさせられました。ジェンダー（男ことば女ことば）や丁寧さ（「お〜」の有無）などを巡って揉めたことも一度ではありません。自分が当然と思ってきたことがそうとは限らないということに気づく、いい機会になりました。気づきと言えば、会話や例文作りの際、これまで使っていた教科書の会話パターンや言い回しが体に染みついてしまっていることにも改めて気づかされました。「〇〇の呪縛」には今しばらく苦しめられそうですが、自分たちの「こうしたい!」に立ち戻って、呪縛からの解放に向け努力していきたいと思えます。

そして、出来上がったのがこちらです。



4. 『さんぽ』を使ってみて

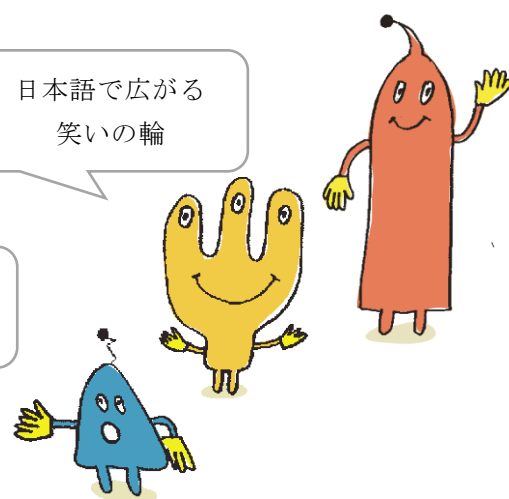
授業がやりやすい。

フランス語の
使用が増えた。

日本語で広がる
笑いの輪

一方通行じゃない。

色々試せる。



こうして出来上がった『さんぽ』を実際に使った授業の感想も三者三様ではありますが、総じて、自分たちで作っただけあって授業がしやすいです。文法説明はシンプルでも自分たちの納得のいくものだし、行動中心アプローチが上手くいっているユニットは楽しくかつ有意義に表現や語彙を導入することができます。例えば、クラスメートに誕生日プレゼントを選ぶために、好き・嫌い、趣味の言葉、頻度の副詞、授受表現を扱う。ユニットの最後の仕上げとして、習ったことを使って実際に学生同士がやりとりできるので、教師にとっても学生にとっても何のために学ぶかが明確でわかりやすいのではないかと思います。



学生が習った語彙文法を使って実際に自分の言いたいことを言う、または行動すると、教師もはっとするような間違いが飛び出したり、答えに窮するような質問が出たりすることもあります。文法や語彙についての説明が必要な場面が増えたので、『さんぼ』を使い始めてから教室でフランス語を使う機会が多くなりました。日本人教師なのだからもっと日本語で話してインプットを増やすようにするべきだという思いも時々去来するのですが、限られた授業時間を有効に使えるように、また学生の知的好奇心に応えるために、多少のフランス語使用も必要だと感じます。これからも、教室での言語使用のバランスについては考えていくべきだと思っています。

ご覧のように本書メインキャラクターはフランス人学生のエマと宇宙人たちです。ロケットで週末、大阪に遊びに行ったり、将来の夢は「人間になること」だったり、その行動や発言で学生の笑い（苦笑いの場合もありますが）を引き出します。こういうちょっとしたユーモアも教室内コミュニケーションを活発にする要因の一つではないかと思います。もちろん、毎年担当するクラスのカラーは違うので、反応がいいクラス、おとなしいクラスと色々ですが、宇宙人キャラは学生たちにも受け入れられているようです。

この教科書を作成・使用することで、私たちのモヤモヤはだいぶ解消されてきました。行動目標に向かっての道筋は一本ではありません。これからも試行錯誤を重ね、学生とさんぼを楽しみながら自分たちなりの教室を作っていきたいです。

5. そして、これから

今回、このような振り返りの機会をいただき、三者三様の「初心」に戻ることができました。初心に戻ったことでの気づきは、教科書作成においても、実際の教育実践においても「〇〇の呪縛」からまだまだ解放されていないということです。けれども、それぞれの「私」の学びの場のために作成した『さんぼ』を使用した教室では、現在、自由で楽しいやりとりが行われており、私たちが目指してきたものはある程度達成されているのではないかと思います。今後もこの教科書の周りに、自由で楽しいやりとりが生まれていくことを信じています。

現在、この『さんぼ』制作の出発点である第3巻の出版に向け、地道に準備をしています。そして、また色々な「こうしたい」の夢が膨らんでいます。



『さんぼ』で学ぶ学生たち

エマちゃんエコバックに入
った全3巻セット販売
(「エマちゃんのお宝」袋とじ付き)



音声やアニメーション
など視聴覚教材を！



各ユニットで使える素材
集をサイトにアップ！



副教材や補助教材なども制作してみてもどうかというお声をいただくことがあります。そのため、『さんぽ』を使用してくださっている先生方や学習者のみなさんから、各ユニットで使える素材やサイトを募集し、シェアし、発信するところから小さく始めてみるのもいいかもしれないとも思っています。ただ、なるべく使ってください先生方や学習者のみなさんが自分で工夫したり、発見したり、発展させていくための道具として『さんぽ』をご利用いただきたいと考えているため、視聴覚教材も含め、あまりかっちり決めた教材を作りあげてしまうと、今度は「エマちゃんの呪縛」になってしまうのではないかと心配が頭をもたげます。『さんぽ』は、それぞれ独自の材料や調味料を加えて、好みの味に料理するとおいしくいただけるような素材としてご利用いただけるような教材でありたいと考えています。

どこかで『さんぽ』を見かけられたら、是非手に取ってご覧ください⁽⁵⁾。また、機会がありましたら、お使いになっていただくと大変嬉しく思います。

皆さまのご感想やご指摘を
宇宙人共々お待ちしております。



注

- (1) 『さんぽ vol.1』 (ISBN : 978-2-7302-1637-1) <<http://www.editions.polytechnique.fr/?afficherfiche=212>>
『さんぽ vol.2』 (ISBN : 978-2-7302-1653-1) <<http://www.editions.polytechnique.fr/?afficherfiche=219>>
(2017年5月15日) なお、各リンク先ページの右下にある「Table des matières」をクリックすると目次が、「Extrait de l'ouvrage」をクリックするとユニット1が閲覧できます。
- (2) Denyer, M., Garmendia, A. & Lions-Olivieri, M. (2009) « Version Originale 1 », Éditions Maison des Langues.
Denyer, M., Garmendia, A., Royer, C. & Lions-Olivieri, M. (2010) « Version Originale 2 », Éditions Maison des Langues.
- (3) 庵功雄監修 (2010) 『にほんごこれだけ!』 ココ出版
- (4) 上記注(1)の各リンクの下にある「Extrait de l'ouvrage」をクリックするとユニット1がサンプルとして閲覧できますので、合わせてご参照ください。
- (5) 日本国内では、国際交流基金日本語国際センター（さいたま市）の図書館に所蔵されています。

参考文献

- (1) 鬼頭夕佳 (近日掲載：発表 2013) 「学習者の多様な姿を捉える —フランスの理工系大学の事例から—」 『フランス日本語教育』 第14回フランス日本語教育シンポジウム報告・発表論文集 No.9, <<http://aejf.asso.fr/archives/category/symposium/actes?lang=ja>> (2017年5月20日)
- (2) 鬼頭夕佳 (2015) 「文法どう教える? —教室実践が示唆する文法教育における対話の重要性—」 『ヨーロッパ日本語教育』 第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集 No.20, 377-378.

- (3) 川上ゆか・鬼頭夕佳 (近日掲載：発表 2013) 「日本語それだけ?! —「私」のコースデザインを指して—」『フランス日本語教育』第 14 回フランス日本語教育シンポジウム報告・発表論文集 No.9, <<http://aejf.asso.fr/archives/category/symposium/actes?lang=ja>> (2017年5月20日)
- (4) Beacco, J., Kalmbach, J. & Suso López, J. (2014). Les contextualisations de la description du français dans les grammaires étrangères : présentation. *Langue française*, 181, (1), 3-17.